

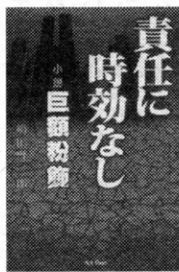
読め!さもなくぼ死を!

### Kenzaburo Shimada

1946年生まれ。早稲田大学大学院修了後、鐘紡株式会社(後にカネボウに社名変更)入社。00年取締役、02年常務取締役兼常務執行役員・財務経理担当就任、04年退社。常務就任後は最大懸案であったアクリル事業全面撤退を果たすなど、カネボウ再建に身を投ずる。05年7月に有価証券報告書虚偽記載の疑いで逮捕されるが、粉飾に反対していた事実が明らかとなり不起訴。本書にて還暦デビューを果たす

# 本人襲撃! 話せばわかる!

## 嶋田賢二郎



「責任に時効なし」  
小説 巨額粉飾  
アートデイズ 1890円

日本を代表する名門企業の常務取締役として巨額粉飾事件に遭遇し逮捕された著者が、その体験をもとに綴った長編小説。企業崩壊をもたらした組織的粉飾の実態を当事者ならではの詳細な描写で初めて明らかにし、さらに、粉飾を長年指示あるいは放置してきたにもかかわらず、時効の壁によって不問に付された歴代の経営者たちの責任を問う

撮影/高橋定敏

## 企業とは、トップの感情に 振り回されるものだ

小説仕立てとはいえ、内容は常務として実際に体験したカネボウ粉飾事件の一部始終。坂道を転げ落ちていくような名門企業の転落ぶり、読んでいて気が重くなるようなリアルティでした。「書くにあたっては、確かに葛藤もありました。でも、こうして世に出すことで少しでも粉飾が減るかもしれない。大きな犠牲を払ったカネボウ事件が世の中に貢献するには、こういう形しかないんです」——当時の同僚からはどんな反応がありましたか?

「よく書いた、そして『知らなかった』という声が大半です。粉飾の存在自体は誰もがわかっていましたが、経営内部の具体的な状況までは知らない人がほとんどでしょう。そもそも、粉飾というのは大きなリスクを負ってムリヤリ利益を出し、税金を払うわけで、会社にとってまったく無益でバカバカしいこと。積極的にやりたい従業員や役員なんていません。メリットがあるのは、ほぼたつたひとり権力者、つまり組織の為政者です。粉飾は、トップの自己保身というただそれだけの目的で行なわれるんです」——カネボウほどの大企業でも、経営トップの保身が従業員の総意を凌駕してしまう?。「企業とは、トップの精神構造や感情に悲しいほど振り回されてしまうもの。まさに『企業は人なり』ですよ」——それでも、最後の経営者は逮捕され有罪となりました。「責任に時効なし」とは、30年にわたり行なわれてきた粉飾に積極的に関わりながら、法律上はなんの罰も受けていない人たちへの言葉ですね。

「事件がひととおり終わった後に自分の正当性を主張するような人もいて、ありえないことですよ。会社がなくなり、厚生年金基金も解散になり、そんなわれわれの足を、逃げ切った人たちが引張るんですから」——次期社長といわれた嶋田さんも、結果的には粉飾に反対していたことが証明されましたが、一度は逮捕されたと思った。失ったものは大きかったと思います。「ただ、もし仮に僕が社長になれたとしても、それが果たしてなにほどのものだったのかと今は思いますね。むしろ、ああした体験があったからこそ小説が書けて、全国の書店にそれが並んだ。考えようによっては、この小説に3年という月日を費やしたことで、人生の深さ、不可思議さをより知ることができたんじゃないかと思います。僕の人生の第一幕は、この小説を書いたことで終わり。30年間、自分なりに一生懸命やりましたから。これからは、まったく違う第2幕に新しく足を踏み入りたいですね」